

ISO/TC207/SC5 併設

ワークショップ(2018年12月5日)報告

"Quantifying GHG emission reductions of goods or services through Global Value Chain"



*National Institute of Advanced Industrial Science and Technology
Research Institute of Science for Safety and Sustainability*

国立研究開発法人 産業技術総合研究所
安全科学研究部門 社会とLCA研究グループ

本下 晶晴

m-motoshita@aist.go.jp

プログラム

- 開会挨拶
- セッション1: 削減貢献に関する世界の活動
 - 日本 (METI、経団連)、フランス、BASF、スイスの活動紹介
- セッション2: 削減貢献の次のステップ
 - 削減貢献概念に対する批評
 - ディスカッション

参加メンバー

- ISO/TC207/SC5 メンバー
 - 13名：アカデミア、民間企業、コンサルなど
 - 日本、フランス、ドイツ、オーストラリア、アメリカ、カナダ、インドネシアなど
- 講演者・関連団体メンバー
 - 5名（METI、経団連、総研）
- 研究会メンバー
 - 11名

Session 1 : 削減貢献に関する世界の活動

- The Government of Japan' actions for avoided emissions (METI)
- KEIDANREN's voluntary action towards a Low Carbon Society (Japan Business Federation)
- Activities in France
- Climate Protection with BASF
- Avoided GHG emissions by increasing the cross-sectional area of cables (Switzerland)

日本政府の活動紹介 (METI)

- 日本政府の地球温暖化対策計画
- 80%削減に向けた日本のGHGs排出の状況
- 日本の産業界における低炭素化社会に向けたアクションプラン
- 温室効果ガス削減貢献量定量化ガイドライン (METI)
- COP24でのサイドイベント紹介 (METI with Keidanren and Global Industrial and Social Progress Research Institute (GISPR))

経団連の低炭素化自主行動の紹介

- 経団連の概要
- 低炭素社会実行計画における4つの柱
 - 国内事業活動からの排出削減
 - 主体間連携の強化
 - 国際貢献の推進 (途上国支援など)
 - 革新的技術の開発
- グローバルバリューチェーンを通じた削減貢献
 - コンセプト(定量化の有用性)
 - 事例紹介

フランスにおける活動紹介

- 2つのゴール
 - 起こりうる結果を事前に定量化
 - 企業努力のコミュニケーション
- 2012-2016 ADEME (French EPA):
定量化手法の開発
- 2017-2018 EpE:
コミュニケーションのための推奨事項
- SCORELCA project (LCA学会研究会に類似)

BASFの気候変動対策紹介

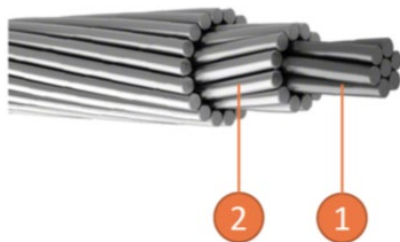
- 化学製品によるGHGs排出削減への貢献
- 気候変動に対するBASFの戦略
 - 製品開発(排出削減貢献、気候変動適応)
 - 生産活動およびバリューチェーンでの排出削減
- Corporate carbon footprint (scope 1, 2 and 3):
15% for scope 1 and 2, 85% for scope 3
- BASF製品による削減貢献量評価事例(断熱材、触媒、グラウト材)
 - 貢献率をコスト比率により推定

電線ケーブルの評価事例紹介

- アルミニウム皮膜のケーブルによる送電線の送電ロス削減による効果の推定事例
- 製品レベルのCFP算定を基に、地域・世界スケールでの削減効果を推定

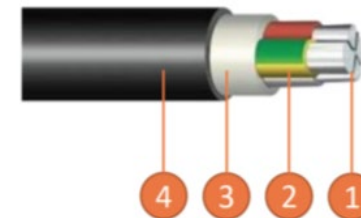
• Cable structure

- steel core in layers ①
- Al conductor in layers ②



• Cable structure

- four-wire Al conductor ①
- XLPE insulation ②
- (Filler) ③
- PVC sheath ④



Session 2 : 削減貢献の次のステップ

- 削減貢献量評価に対するアンケート調査結果の紹介(削減貢献量評価研究会)
- ディスカッション
 - 削減貢献概念に対する批評(Matthias Finkbeiner 教授:ベルリン工科大学)
 - 総合討論

Finkbeiner教授による批評

- 名前の印象がグリーンウォッシュと捉えられかねない (いいとこどり)
- GHGsのみしか考慮されていない
- ベースラインの設定方法によってグリーンウォッシュとなりかねない
- 消費者へのコミュニケーションが非常に重要で難しい
- 同一製品の貢献を異なる主体が評価するダブルカウントの問題
- 削減が生じるタイミングの問題
- 同一製品でも状況により貢献が異なる (例: 中国のEVと日本のEVでは貢献量が違う)

ISO規格との関係

- カーボンフットプリントのPCRを利用する限りはISO規格に完全に準拠していると言える
- 検証に関してはISO14064が参考になる (ISO14064-1: carbon footprint of organization, 14064-2: products and projects, 14064-3: verification)
- コミュニケーションに関してはISO14026が参考になるだろう
- ISO14040/14044での比較主張とは: 市場における競合製品と比較した環境影響の完全な優位性を主張すること(という解釈)

技術・手法面における課題

- GHGsだけでなく他の環境影響領域の評価へも広げる必要性
- 現実と算定のための仮定のギャップ（特にベースライン）
- 廃棄段階を除外することは将来世代へのミスリードにつながる

コミュニケーション上の課題

- 評価の目的を明確にすることが重要
- 削減貢献はあくまで結果として予想される排出量であり、実態とのギャップがある可能性
- ネーミングとして“avoided”の代わりに“reduction”として、“potential”を加えて、“emissions”の代わりに“footprint”とした方が良い
- “reduction”よりももっと中立的な表現が望ましい

全体を通じての印象

- ネーミングに起因するイメージからの抵抗感が強い
- 削減貢献量評価のニーズの背景に対してはある程度理解されている
- 企業側の利用目的もまだ模索中
- 課題は出口(利用目的)によって異なるが、各自の想定する利用目的のイメージが異なるので認識のすり合わせ(整理)が必要
- 出口に合わせた、方法論の課題整理が不可欠